

ここに居ります園児は、川崎のひかり幼稚園の園児でございます。四歳児と五歳児と半々になって居ります。この方式で漢字学習を始めましたのは六月でございますから、まだ三ヵ月とちょっとにしかありません。私は、一昨日、一度だけこの子供たちに会って、お話をいたしました。それで今度、子供たちにおもしろいお話をすると、かういふ約束になつての今日でございます。

(園児一同にむかって)「皆さん、今日は」

(園児一同)「今日は」

「一昨日、先生は、皆さんにお話してあげましたね。今日も、お話をしあげるといふお約束でしたね。今日はどんなお話でせうね。……その前にね、皆さんに漢字を少し教へてあげます」

(「亀」の字を示して)

「この字は見たことがないでせう」

(園児一同)「カメ！」

「さう、亀です。これもう教はつてゐたのね。(次々にカードで文字を示しながら) ちゃあ、これは？」

「足が！」

「さう、『亀は』『足が』、ではこの字なんだか^{わか}解る？」

「遅い！」

「さう、……ちゃあ、この字知ってる？」

「ウサギ！」

「さう、『兎』。……これは？」

「足が」……(文字が示されぬ前に)

「速い！」(笑声)

「さう、『速い』。カードが出ないうちに読んちゃったねえ。見ない字が読めるんだから、皆さん偉いな。それではね、これは、何といふ字？」

「耳が！」

「それで……」(文字を捜しているうちに)

「兎は耳が」「長い」(笑声)

「ああ、『兎は耳が長い』ね。どうも見えないうちに読めもやっ
たらしいね。……では、この字はまだ習はないでせう？」

「ゾオ！」

「おや、これも知ってたの。では、この字は？」

「鼻が！」(すぐ続けて)「長い！」(笑声)……

「ところで、今日のお話はね、これが出て来ます」(猿のカードを示す)

「サル！」

「さう、『猿』さんが出て来るんです。この字は？」

「顔が！」

「さう、『顔が』……では、これは？」

「赤い！」

「さう、『赤い』ね。では、続けて読んでください」

「猿は」「顔が」「赤い」

「『赤い』の上に、かういふ字がありますよ」

「なぜ赤い！」

「さう。今日のお話は、さういふお話ですよ。お猿さんの顔は赤いでせう。それで、お猿さんの顔はなぜ赤いかといふお話をします。……このお話はね。(文字のカードを掲示しながら)『昔』のお話です。……この字知ってる？」

「森の！」

「さう。『昔』『森の』『中に』『猿』……それから、この字知ってるかしら？」

くま
「熊！」

「ああ、この字も知ってるのね。でも、これは知らないでせう。(鹿しかを示すが、だれも読まない)……これは『鹿』っていふ字です。一緒に読んでください」

「鹿！」

「『猿』『鹿』……次、これは読めたね」

「兎！」

「仲良く！」(次のカードが出ないうちに「くらして」……「住んで」……といふ)

「さあ、さうかな。……こんな字は初めてでせうね。これは『一しょ緒に』と読みます。はい、一緒に読んでください」

「一緒に！」「住んで！」「みました！」

「ある時！」「熊さんは！」

「この字は知らないでせう？」

「仲間に！」「魚の！」

「これは知らないね。見たことないね。これは『御馳走』と読みます」

「御馳走！」「しました！」

「熊さんは、みんなに魚の御馳走をしたんです。(ここからカードなしにお話を進める)熊さんはね。魚を取るのがとても上手なんです。それでね、お猿さんは初めて魚を食べてね、……今まで、お猿さんは何を食べたか知ってる？」

(一人の園児)「バナナ！」

「うん。バナナなんか食べるね」

「栗とか、くだもの！」

「さうさう。木の実やくだものなんか食べるね。でも、魚なんか食べたことがなかったの。それで、熊さんに御馳走をしてもらって、初めて食べたので、とてもおいしくてね、ぼくも魚を取って食べたいなあって思ったんです。それで熊さんに、魚の取り方を教はったんです。熊さんが、何と教へてくれたかといふとね、川の中にしっぽを垂れてみなさいって。さう

するとね、川の中の魚が、そのしっぽに、何かおいしさうなものがあるぞ、といふのでね、食いつくんですって。そして、痛あくなるのを我慢してみるとね、そのうちにしっぽに固あく食いつくんですって。固く食いついたところでね、しっぽをぐっともち上げればね、魚が取れるんだって、教へてくれたの。さあ、猿さんは、夜になったら早速魚を取りに行きたいと思ってね。(ここでまたカードを掲示し始める)いいですか、はい！」

「夜になると！」

「さう」

「猿さんは！」「川に！」

「やって来ました！」

「さう、猿さんは川にやって来たんです。さうしてね、この字わかるかしら？」

「冷たい！」

「さう、それから？」

「風の！」「吹く！」「寒い！」

「これわからないでせうね、『晩でした』と読むの。いいですか。はい、それから？」

「猿さんは！」「寒いのを！」

^{がまん}
「我慢して！」

「『我慢して！』これ読めたの？ この字まだ習ってないでせう。よく読めたね。……これは？」

「尾！」

「さう。これは『尾』と読みます。しっぽのことなんです」

「知ってる！」

「え、知ってるの、尾のことをねえ」

「水の中に！」「入れました！」

「さうしたら？」

「尾が！」……

「これ^{わか}解らないのね。『何かで』と読みます。ああ、これも解りませんね。『締めつけられるやうな』と読みます。……おや、次も難しいね。『感じ』と読みます」

(一人の園児)「あ、知ってる！」

「ほんたう？……では、続けて読んでみませう」

「何かで！」「締めつけられるやうな！」

「感じがしました！」

「さう。(また話になる)その締めつけられるやうな感じがね、だんだん痛くなって来たんですって。さあ、これはうまいぞ。魚がかかって来たぞ、といふんでね。お猿さんはね、ジーンと痛いのを我慢して。(ここでまたカードを見せる)はい！」

「猿さん・は！」「尾を！」

「これわからないね。『引っ張りました』と読みます」

「引っ張りましたが！」「動きません！」

「さう。(話になる)しっぽが少しも動かないんです。それで、お猿さんはね、これは大きな魚がかかったぞと思って、それでね、ウーンと力を入れて、顔を真赤にしてね、引っ張ったんです。そしたら、プツンと尾が切れて、お猿さんはひっくり返ってしまったんです。お猿さんのしっぽが川の水に凍りついてみたんです。(カードを見せる)」

「たうとう！」「尾が！」

「これは『真中から』と読みます」

「真中から！」「切れてしまひました！」

「その時から！」「猿さんの！」「顔か！」「赤く！」「尾が！」「短いのださうです！」

「といふことなんです。今日の先生のお話はこれでおしまひです。……今のお話が、ここに書いてありますから、これから皆さんに、一緒に^{しょ}読んでもらひます。(掲示板を裏返して、用意してある全文を見せながら)これ見えますか？」

(一人の園児)「あ、さっきのと同じもんだ」

「さう、今と同じものなんです。さあ、読めるかな。……読めない字もかなりあったと思ひますが、元気よく読んでくださいね」

(園児一同) 「はい！」「昔、森の中に、猿、熊、……鹿、兎が、仲良く、一緒に、住んでゐました。ある時、熊さんが、仲間に、魚の御馳走^{ごちそう}を、しました。夜になると、猿さんは、川に、やって来ました。冷たい、風の、吹く、晩でした。猿さんは寒いのを、我慢^{がまん}して、尾を、水の中に、入れました。尾が、何かで、締めつけられるやうな、感じがしました。猿さんは、尾を、引っ張

りましたが、動きません。たうとう、尾が、真中から、切れてしまひました。その時から、猿さんの、顔が、赤く、尾が、短いのださうです」

「はい、大変よく読めました。(拍手)それでは、先生のお話はこれでおしまひ。皆さんに今度会った時には、また、おもしろいお話をしてあげませう。今日はこれでさやうなら」

(園児一同)「さやうなら」(退場)